

神楽陽子

表紙イラスト：ひなぐま

悪

霊

退

治

は

有

料

に

て

ブランフォードクローゼ

試し読み版



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ブランフォードクローゼ 悪霊退治は有料にて』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

ブラン
フ
オード
クロ
ゼ

悪

神楽陽子

表紙／ひなくま

霊

退

治

は

有

料

に

て

登場人物紹介

Characters

クローゼ^{わかば}=若葉=ブランフォード

超常現象相談所・デーモニックサーチの所長を務めるエクソシスト。欧米系のハーフで、お嬢様育ちのせいか勝気で高飛車でワガママな性格。

^{しどうりん} 紫藤凜

デーモニックサーチの一員でクローゼの補佐と「監視」を担当する少女。身勝手なクローゼを叱ることも。

斜陽が教室の、廊下側の壁さえ這い上がる夕刻。その一室では数名の女生徒が、小さく集まって身を震わせ、恐怖にさっと青ざめた。

「いや……こないで……!」

床に広がる影がムクリと起き上がり、人に近い形となり、一匹、また一匹と仲間の数を増やして獲物を壁際まで追い詰めるのだ。

口に当たる部分が上下に裂けて鋭い牙を光らせ、足の先まで届きそうなくらい長い腕は鉤爪を鳴らす。

無力な少女たちはへたり込んで眼を瞑り、絶叫するしかなかった。

「いやあああああああああああああ!」

ガタアンツ!

唐突に教室のドアが吹き飛ぶ。

「お遊戯の相手はこっちよ、悪霊ども。ようやくお出ましね」

颯爽と現れたのは黒衣の少女。異形の魔物を見つけると、心待ちにしていたかのように微笑んで、ゴシックドレスのロングスカートをふわりと膨らませ、右手のロッドを垂直に突き立てる。

目尻の高めに切れ上がった赤い瞳は絶対の自信に満ちていた。手入れの細かい長睫毛が瞬きを大きく感じさせる。

瑞々しい唇が得意そうに白い歯を見せた。

「あたしは退屈なのは大嫌いなもの。速攻で始めちゃおうかしら？」
すらりとした顔立ちが銀色の髪を前にも靡かせる。

細身の初動に遅れて波打つロングヘアと、漆黒のスカートが、少女の軽いステップに大きな躍動感を持たせた。

背丈以上も長さのあるロッドをバトンのような感覚で旋回させ、先端の十字架を水平に構えたら加速をつけて突進する。

「ブランフォード家のあたしに狩られることを喜びなさいッ！」

クローゼわかば若葉わかばブランフォードは正面から群れに飛び込むことで、敵の群れを反射的に散開させ、最優先で女生徒たちの前にたおやかな身体を張った。

「もう大丈夫よ、見ているといいわ」

エクソシストの少女を引き裂こうと、悪霊と呼ばれた一匹が鉤爪を振り下ろす。それを真横に構えたロッドで受け止め、小柄な細身には大きめの胸と、ロザリオを揺らす。

「父と子と精霊の御名において、我は命ず！ 光あれ、と！」

ゴシックドレスの装飾でもある銀の鎖が青白く輝いた。聖なる鎖を解きもつてクローゼは、執拗な鉤爪をロッドで弾き、もう一匹の接近を石突で返す。

鎖は女生徒たちの周囲半径一メートルをなぞり、法陣を浮かび上がらせてから、弾丸の

ように駆け出すクローゼに続いてジャラジャラと伸びた。

「いくわよ、チャチな悪霊さんたち！」

挑発された悪霊どもは、女生徒たちが結界に守られたことにも気づかず、奇声をあげてエクソシストに襲いかかる。

「数では質には勝てないこと、証明してあげるわ」

しかし黒衣の少女は左右二方向から挟まれようと、ロッドの上下を巧みに捌いて攻撃をいなし、教室を縦横無尽に走り続けた。

くるぶしまであるロングスカートに足を取られることもなく、椅子と机を階段のように昇り、鎖を引いて飛び降りる。

真後ろを空振りする悪霊の豪腕をからかうように髪とスカートを翻して。

「すごいじゃない？ でも、あたしのほうが断然すごいわよ！」

余裕たっぷりにはにかんでロッドを返し、十字架の角で敵の顔面を打つ。すると激突の瞬間に眩い光が弾けた。

ドガアアーン！

頭と脚を反転させて壁に叩きつけられる一匹目。他の数匹が驚く間にもクローゼは術式の完成を進ませ、教室の真ん中で足を止めたら、残りの鎖をロッドに巻き上げる。

術式の発動に勘づいたららしい悪霊たちが一斉に飛びかかろうとした。

しかしその時にはすでに、教室の床一面には鎖で六芒星が描かれており、あとは中央でクローゼがロッドを突き立てれば。

「神よ、厳肅なる審判をここに！ 聖我一体・四十六式、ホーリークロス！」

真つ白な光が教室の外にも溢れ、轟音を校舎全体に響かせる。

ズツガアアアアアアアア————ンツ！

竜巻に巻き込まれたかのように椅子が、机が、そして悪霊が床から剥がされて教室の天井高くまで放り上げられ、不浄な存在だけが神々しい光の中で塵と化した。

間もなく光は消えて空気がピタリと止まり、蛍光灯の半数近くが椅子やらに紛れて落下する。窓ガラスも粉々に割れて床に散乱だ。

しかしクローゼ本人と女生徒たちには傷ひとつなかった。

「……まるで張りが無いわね」

ロッドを右肩に傾けると、銀の鎖がジャラララと音を立ててドレスに戻っていく。鎖のすべてを回収してから、エクソシストは得意げに白銀の髪をかきあげた。

「命の恩人サマの名前、ちゃんと憶えておきなさいよ？ あたしはデモニック・サーチのクローゼⅡ若葉Ⅱブランフォード。お礼は事務所までね。はい、電話番号」

ところが洒落た容姿とは裏腹に。女生徒のひとりに手渡したのは、どこにでもありそうな安っぽいチラシであり、拙い手書きでこう書かれてある。

「超常現象でお困りのそのこのアナタ！ 有料にて相談お待ちしております。デモニック・サーチ鹿しのクローゼⅡ若葉Ⅱブランフォードまで」

「しか、し……？」

「あー、いいのいいの！ 顔写真はサービス」

漢字の間違いを指摘されたことには気づかず、ひっくり返したパズルのように滅茶苦茶になった教室を一瞥すると、クローゼは足元の椅子をロッドで転がし、鼻歌交じりに戦いの場をあとにした。

悪霊の群れを爽快に一掃し、機嫌をよくしたクローゼは、今回の仕事の拠点である保健室に急いだ。DD学園の校舎一階、食堂に続く廊下の途中にある。

「ただいまー、凜。確かに2―Cに出現したわ」

ガラッとドアを開けても、薬品類に独特のにおいはない。代わりにパソコンや大型の機器を無数に並べてあるためだ。

白いカーテンを埋めんばかりに積み重ねられたのは機材の山。赤外線カメラやサーモグラフィやらのモニターには、学内の要所要所が映し出されてある。

ノートパソコンに向かってキーを叩いていた少女が、手を止め、眼鏡を外してクローゼの顔をちらりと確認した。

「んあぐっ？ んもお、な……あに、ひてんのよ……っんぶ！」

角度のついた怒張が口蓋を穿つように擦り、唇は無理な挿送でひしゃげてしまう。口内粘膜に男根の味が染み渡り、刺激臭のきつきに嗅覚がおかしくなる。

『へへッ、想像以上だ……女を嬲るのは男の特権だな！』

腫れた亀頭がビクンと不気味に脈打ち、小村は歓喜に震えた。クローゼは悔しさに肩をわななかせるも、下世話な男を睨むことしかできず、逆に笑い返される。

『いいザマじゃないか、ハハハ！』

同時に肉杭を深く打ち込まれる。瞬間的に息が詰まって、唾液が鼻に逆流し、その痛みが心ならずも涙腺を緩ませた。

「んく！ あく……しゆみ、はぶう、へん……たいッ！」

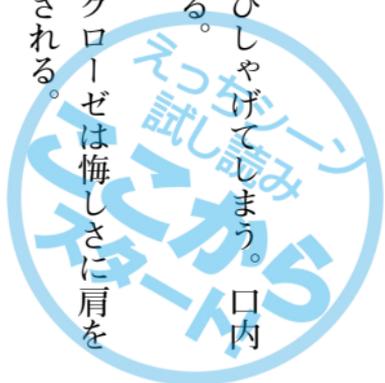
視界が涙の膜で揺らめく。趣味の悪い辱めを受けるくらいなら、ぶたれるなりするほうがまだましだ。

性を踏みにじられる屈辱に自然と拳に力が入る。

「あんたは、れつたいにあたひが、やつつけて……あつうぐ！」

しかし少しでもクローゼが力を発動させようとすれば、先まわって銀の鎖が細身を苛烈に、ドレス越しにも跡形が残らんばかりに締め上げるのだ。

抵抗の回数だけ疲労を重ね、酸素をより多く取り込むべく緩んだ唇は、栓に使うには太



すぎる剛直でみっちり封じられる。

息が苦しい。

「はあつむ、うぐ……こい、つ……!」

それでもクロローゼは反抗の色を変えず、キツと眉を吊り上げた。このような下衆に服従するつもりはない。だからこそ軽蔑に満ちた視線を飛ばしてやる。

小村が不愉快そうに歯を軋ませた。

『……なんだよ、その眼？ クラスメイトと同じ眼で僕を見やがって……女は泣くか喚くかしろよ、つまんねえだろ!』

彼に呼ばれ、他の悪霊もうぞうぞと集まってくる。

エクソシストの無力化を知った下級霊たちも陵辱の手を伸ばしてきた。人外の者に身体をまさぐられるおぞましさ。

「ひっ……んぐ、うつんむ、んあぷ!」

漆黒のゴシックドレスが布を何層にも重ねているとはいえ、自分の意志とはまったくの無関係に女体曲線をなぞる複数の手に、寒気も怯えも禁じえない。

下級霊は低い唸りを近づけて、少女にしては豊満な肉体を無遠慮に撫でまわす。位置の高いたわわな果肉を右も左も引っ掴まれ、押し揉まれた。

「あむう？ んつく、はあ……んぶつ、やめてったら」

下の麓に鎖が食い込んで、持ち上げられた豊乳の全面を、絹地越しに何匹もの虫が這うかのようだ。相手が悪霊だけに気味の悪さも増幅される。

なのに肉体は、与えられた刺激には正直に、クローゼの精神とは別に反応し、牝の官能を開花させてしまう。最初は苦しいだけだったが、揉まれるたびに乳房の奥で疼きのようなものが生じ、肌が汗を滲ませて火照り始めた。

(ど……どうなってるの?)

皮下脂肪が異質な熱を帯び、血脈が性感帯を中心にトク、トクと流れを主張する。少女本人は拒絶しているのに、牝の性は心臓を高鳴らせて昂り、肺も熱化させた。

「んぷ！ んむふ……あ、あはあ」

口枷がわずかに緩むと、隙間から危うい色の吐息が漏れる。強張っていた肩からは力が抜け、華奢な体軀は鎖の重量に屈した。

そうして前のめりになった分だけ、自ら剛直を深めに頬張ってしまう。

「んむああぐツ？」

『そうだ、ハア、もつと吸いついてきやがれ！』

嫌悪感から呑むに呑めない唾液と臭気が溜まり、幼い作りの頬がもつこりと膨らむ。息苦しさに涙目となったクローゼの小顔は、眉こそ弓形に引き締めてはいるものの、陵辱に涙を流す心弱い少女のごとく見えた。

「誰が、あつく、あんたの……なん、か……!」

咽が詰まって声が濁ってしまう。さながら嗚咽であるかのように。

エクソシストが反抗する間も下級霊はしきりに手を進め、鎖を巻いたゴシックドレスのあちこちを圧迫した。黒絹に隠れた肢体のラインを探り当て、スカートの表に太腿の線を浮かび上がらせる。

『随分とスケベな身体してやがるな。何人くらいとヤつたんだ?』

女の性を無視して憚らない言動には心底嫌気が差した。剛直を舌で垂直に押し出し、侮辱の言葉を返してやる。

「あんたこそ……んぐ、何十人くらいに、はあ、嫌われたのかしら? 男だって、こんなヤツと付きあつてられないわけだわ」

感情の起伏の激しい悪霊が憤慨した。

『どいつもこいつも僕を馬鹿にしやがって! 許さないぞ、お前も、あいつらも!』
怒号をあげてクローゼの前髪を掴み取り、肉棒を突き込んでくる。

「ああぐぷ! むう、んぶうッ!」

『ぼら見ろ、喘ぐしかできないだろ? もう一度いつてみるよ、牝ブタ!』

上位霊の憤りに呼応して、下級霊どもの手も荒くなる。鎖以上の力で両腕を背中側で固められ、筋肉に鈍い痛みが走った。

「んあつく、痛い……は、放せて、いって——あぶう！」

口は肉太で塞がれ、濁った唾液だけが唇を捲って出入りを許される。涎の雫はゴシックドレスの、胸の谷間を大胆に覗かせるVネックに垂れ落ち、白い肌をヌメラせた。

悪霊の手が長い指を深々と食い込ませ、蜘蛛のように乳房を捕らえる。柔らかな双乳は原型がわからないほど形を変え、乳悦の電圧を高めていった。

(やだっ、ビリビリって……してる?)

見えずとも、感覚ではつきりと読み取れる。乳芽の蕾がしこり、独特の圧迫感を先端に集中させるのだ。堪えきれない生理的な疼きが、煩悶を呼び、無意識にもクローゼは敏感な乳頭を絹地の裏に擦りつけようと身を振る。

しかし薄いといってもニップレスを挟んだブラジャーが妨げとなり、思うようには性感を集められない。

これが自慰ならすぐにもニップルに指を突き立てていた。

(なんで、こんな時にカラダが……)

感じるはずがない、悪霊どもに嬲られて。しかし頭で身体にそう言い聞かせても発情を食い止めることができないのだ。

むしろ感じてはいけないと思うほど、搾乳本来の心地よさを意識してしまう。

「はあつぶ、んぐ……や、やめさせ……はあ、なさいってば、んあぐ！」

「しつこい女だな、もっと奥まで挿れるぞ！」

小村はエクソシストの銀髪を掴んだまま、腰を無造作に前後させた。肉厚のエラが前歯の裏に引っかかり、クローゼの首から上も引っ張りまわされる。

「んぶ！ んあつ、はあぐ……んぼお!？」

大きな飴玉を転がすかのように、頬が左右交互に膨らむ。舌を引っ込めてどれだけ接触を拒もうと、亀頭から頻繁に距離を詰めてくる。

口内に異物を含むことで唾液は分泌を増し、拡張したままの唇から溢れていく。もがく舌がれるれろと剥き身を舐めまわし、相手を悦ばせてしまった。

「いいぞ、ハハッ、その調子だ！」

「ぶふう！ ひっんく、こん……な、もお……おおぐ？」

顎が外れんばかりに腐肉を詰め込まれる。またも呼吸を妨げられて、クローゼは反射的に瞳を強張らせ、屈辱の涙を歪んだ頬に伝わらせた。

（このあたしが、こんなヤツに……ふざけた悪霊なんかに！）

破邪の力を行使しようにも、封印の鎖が腕に激痛を走らせ、床に転がるロッドの十字架をわずかに浮かせることしかできない。

全力を尽くせばこの程度の敵は簡単に撃退できるはずなのに。

「んあつぐ、ふう、んぢゅ……や、やめつ、うぐ！」

「放し、て……ッ！」

『うるせえな。黙って犯されてろっていったらおが！』

膣の中でグリッと手首をまわされた瞬間、クローゼは眼をのけぞって叫んだ。

「あつがはああああ!？」

痛々しく拡がった壺口は充血し、汁の分泌量は夥しい。小村の右腕を肘まですぶ濡れにしてポタリ、ポタリと滴り続ける。

指先で打たれた子宮がドクンと脈打ち、膣筒全体で悦痺を感覚させた。

「ひあつう、ぐ！ あう……ひはあッ！ んはあ！」

『ヒヤハハッ！ いい声しやがって、犯し甲斐のある牝ブタだよ、この女は！』

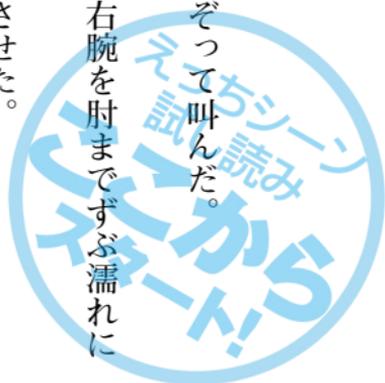
ピンク色の性粘膜が小村の手首に吸いついて、裏返っては伸び、愛蜜を滲ませたら再び淫穴の中に戻っていく。同じ録画テープを巻き戻すかのように繰り返される。

ズチャッ！ ヌチャ、ズブッ！ ズブズブ、ズチャッ！

「あつあうぐ、んふあ！ や……も、もお、やめ……あぐああああ！」

勃起ペニスと比較にならない太さのフィストファック、痛みにも似た快絶にクローゼは悩乱を極め、悲鳴をあげた。深紅の瞳が強張って瞬きさえできず、涙腺がとめどなく涙を注ぐ。端正な相貌をぐちゃぐちゃに濡らす。

下級霊たちは、少女の小顔が惨めな泣き顔のようになるのを眺めて、せせら笑い、頬を



伝う涙を舐め取る者もいた。

「汚い、はあ、近づかないで……あぎいいいいッ！」

不浄な接触を嫌悪して顔をのけようにも。小村が軽く腕を捻るだけで、意識と脊髄反射をヴァギナにごっそりと奪われ、腰から上は無防備になつてしまふ。

煌めく銀色の髪を悪霊どもは、各々の逸物に括り、さらには赤腫れた亀頭をクローゼの美貌に寄せてきた。目に染みるようなきつい腐臭が鼻の奥を直撃する。

「……っ！ くさい、いや……うぐう!!」

口には指の束を詰め込まれ、一切の言語を許されない。赤く染まつて膨らんだ頬を、怒張でなじられ、鼻の下には先走り汁を塗り込まれて。

銀髪幕をくぐつて視界の脇に現れた数本が、弾む双乳を突きまわし、中央の分厚い一本は胸の谷間を下から串刺しにする。

乳果を丸ごと拘束され、上半身も動かせなくなつた。汚いと思うからこそかえつて感覚してしまふ、熱硬いペニス、乳谷を上下に往復する。左右では、頻繁に向きを変える乳頭を別の魔根が執拗に追つてくる。

「んごおつ、んぶ！ んんんッ！ んっあむぶ！」

口の中では舌を摘まれ、呻くことしかできない。抵抗の意思表示さえできなくなつたクローゼを後ろから見て、小村が満足そうにやついた。

『わかったか？ 女つてのは単なる肉の穴なんだよ、男の精液便所だ！ ハハハ！』

「うぐ……あぐっんむう！」

『違うってんなら、人間様の言葉でちゃんと説明してみろよ？ おら！』

そして、勢いを増して練り出される極太のピストン。小村の右手が肉褻のすべてを一度で集め、膣筒の全面に幅のある摩擦を行き渡らせる。

「おま○ご、ごわれる……ッんぐ！ むうぐ！」

神経そのものがのたうつような快楽電流が走り、甘美な法悦が膨れ上がる。

（どうにか……なっちゃう……嫌、なのに……）

行き過ぎた体温上昇で肌は無限に汗を湧かせ、病的な痙攣が連続した。指を嵌められた唇は涎をだだ漏れに、ゼエゼエと息を荒げて満身創痍。精神も抵抗に疲れきって憔悴してしまっている。

そこまで疲れ果てながらも、浅ましく感じる牝の穴は熱痺をばらまく。捲れた壺口から女の白濁をドロドロと漏出し、汗みずくの太腿を淫靡に濡らす。

クローゼの意志はまったく無視して、肉体は刺激のまま発作的に昂り、早鐘のごとく心臓を打ち鳴らした。

「あつぐ、やめ……ぐう、んあうう！」

拒絶のつもりまなざしは、心ならずも妖艶な光を宿し、脳裏には桃色の霧が色濃く立ち

込める。肉粘膜の裏返りそうな狂悦が胎内で反響する。

ドクン、ドクン……ドクン！

眠れる魔の胎動が子宮を鳴らした。

(やっ、出てくる——)

気持ちが悪く、一斉に悪霊どもに襲われる。においの腐りきったペニスと黒い龟头を転がし、口枷のために線の歪んだクロローゼの相貌をなぞって。

唾液まみれになった巨乳にも、魔根は裏筋と側面をしきりに入れ替えて擦り、胸の谷間は一段と肥大な肉柱が大雑把に攪拌する。前に傾く上半身はその一本で反り身の姿勢に支えられた。

「ひはあ……あ、んくふう……！」

しこり勃つ乳頭は弾かれ、吸われ。悦感の肩に突き抜けてうなじをくすぐる。悪寒ではありえない春声漏れてしまう。

汗みずくのお尻は撫でられるたびに敏感に震え、太腿がふるふるると弾んだ。届かない床に爪先を伸ばす、すらりとした脚にも、悪霊たちは手を並べる。

グチャッ！ ズチャッ、グチュ！ ヌチュヌチュッ！

そして肉穴では股を裂かんばかりに。淫肉がギユウツと詰まった小道の中腹で、小村が手首を返し、先を揃えた指を子宮孔まで送り込む。

極太の捻りが性感帯を巻き込んだ。

「っかはあああッ!」

失神寸前の快絶に脳そのものを颯られるかのようだ。クローゼの腹の中で息づく悪魔を封印するためか、銀の鎖は拘束力を強めて細身を締め上げ、フィストファックと肉粘膜を最大限に擦れあわせる。

グリグリと秘壺を穿られ、濁った淫汁を肉唇ごと引きずり出されて。十分な量の粘液がピストンに加速を与え、抗いようのない官能が急速に高まっていく。クローゼはもはや何も考えられず、小村のいう通り「肉の穴」となつて喘ぐしかなかった。

「んぐはあッ! んあ、ひはあ……むぐ! うっうぐ!」

舌を摘まれては嘸下もできず、涙が混ざつて塩辛い生唾を唇の両端から垂れ流す。

(いや、なの……)

抗うべきものは陵辱者なのか、快楽なのかわからないまま。精神は疲弊して、望まずとも肉体は歓喜の汗を流してよがり狂う。

ゴシックドレスの裂け目が広がって新たに露出した肌にも、無数の雫が伝い落ち、白い肌が熱の赤に染まった。

『どうだ、ハハハ! 気持ちいいんだろ?』

「あぐふう! んーッ! んあッ、かは……んくふう!」

菌を立てることもできなくなるまで、口には指を詰め込まれ、溢れる涙は青臭いペニスで拭われる鬼畜の陵辱。なのに肉体は愛蜜を無限に湧かせ、小村の右手をしゃぶり抜くかのように膣肉を緊縮させる。

「んぐっ!? んむ……あぐううう……!」

クローゼは脳裏を真つ白な恍惚に染め上げられ、鎖で括られた身をのけぞらせた。涙で揺らめく視界が教室天井の映像をぼかす。

熱痺が火花を散らし、激烈なバイブレーションが全身を駆け巡った。

「ああああああああああああああああああ——!」

収斂する肉壺が異物を食い締め、肉唇の合わせ目から放射状にしぶきを散らす。

これまでの過酷な性拷問が嘘であるかのような、蕩けるばかりの肉悦に、エクソシストは無意識にも淫猥な笑みを浮かべて、アクメ顔に悪霊どもの汚濁を浴びた。

ビュルンッ! ビュクビュクッ、ビュクンッ! ドブドブドブ!

「ひはあ……あ、んふああああ………ッ!」

刺激臭を蓄えた灼熱のスペルマが、原生生物のように相貌を這いずり。胸の谷間の一本も勢いよく噴いて、白乳を黄濁で汚らしく彩り、下向きの乳頭から、粘性の切れない糸をどろりと垂らす。

白銀の髪も粘りを引いて首筋に絡みつく。ゲル状の陵辱液は、ぬめぬめと脇腹を伝って

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>